

ギュンター・グラス『蟹の横歩きで』試論

— 三世代の物語から見えてくるもの —

林 久 博

1. グストロフ号沈没事件とは

ギュンター・グラスの『蟹の横歩きで』(*Im Krebsgang*, 2002) で描かれるのは、グストロフ号沈没事件と、この事件に直接的または間接的に翻弄される三世代のドイツ人である。まずこの事件そのものについて説明しておこう。

1945年1月30日、東プロイセン一帯のドイツ人避難民はソ連軍の猛攻から逃れるために大型客船グストロフ号に乗り込んだ。だが航行中のグストロフ号はソ連軍潜水艦の攻撃によって沈没し、およそ1万人とも言われる死者を出した。東方難民に実際に起こったこの出来事は、タイタニック号沈没事件を上回る史上最悪の海難事件と言われる。⁽¹⁾ アウシュヴィッツの加害者責任を問われてきた戦後のドイツ人には、これは非常に扱いにくいテーマであった。なぜならそれについて語ることは、自らの罪を相対化する行為として誤解される恐れがあったからである。語り手の母であり、自身が東方難民であるトゥラもこう述べている。「グストロフ号のことは話せなかったのさ。(…) だって、いつも他のひどいこととなれば、アウシュヴィッツとかそんなことだった」(50)。

この小説を物語るのはパウル・ポクリーフケというジャーナリストである。彼に対して、ある老人がこの事件についての報告を依頼したのだった。老人はこの事件を調べていて、グストロフ号の生き残りリストの中にパウルを見つけた。自分の仕事を代わりにやってもらうには打って付けというわけだった。でもなぜ老人は自分でこの仕事をしないのだろうか。これについては間接話法で次のように説明されている。

残念ながら、と彼(老人)が言った。私にはそのようなことはうまくいきませんでした。私は怠慢だったし、残念なことにそれ以上に、私は役に立たずだったのです。ただ言い逃れはしません。ただ告白しておきたいのですが、私は60年代半ば、過去の出来事に飽き飽きしていましたが、絶えず今今今と言ってくる貪欲な現在が私を邪魔してきたからなのです。ちょうどそんなときに約200枚にも及ぶ書類に向かうなんて...だから私には手遅れなのです、と。(77)

ここでいくつか理由が述べられているが、このテーマの扱いにくさが老人をこの事件から遠ざけたと言っているに等しい。だがこの老人には無理だったにしても、それは別の誰かによって語られねばならないことだった。パウルによる間接話法の形で、老人は次のように述べている。

彼（老人）はこう言っている、東プロイセンの避難民の不幸、つまり冬のさなか西へ向かって移動する難民が隊列を作ったこと、死体が雪の吹き溜まりとなったこと、道端や氷の穴で人々が死んでいったこと、こういった不幸を言葉にしておくのは、本来、私の世代の使命だったのだ。凍りたての干潟の氷が爆弾投下や馬車の重みで割れ始めるが、それにもかかわらず、ソ連軍の報復を恐れて逃げてきた人々が、ハイリゲンパイルの町からますます数を増やして、果てしない雪原を移動していく...避難...白い死...彼が言うには、自分の罪を強く意識し、後悔の気持ちを告白しようとは何年も思い煩っていただけに、これほど多くの苦しみを黙ってはいけなかったし、この遠ざけてきたテーマを右翼に絶対にゆだねてはいけなかったのだ。こうした怠慢は言語道断である...と。(99)

ドイツはこれまで加害者として戦争責任を語ってきた。その一方で、被害者としての立場から語ることを怠ってきたために、それが極右に都合よく利用されてしまうこととなった。そのことに対する強い危機意識がこの言葉には込められている。危機意識が老人を駆り立てたのである。⁽²⁾

さて依頼を引き受けたパウルだが、扱いにくいテーマであるがゆえに、その語り方も非常に回りくどいものとなっている。『蟹の横歩きで』というタイトルにふさわしく、右に左に移動しながら徐々に歩みを進めるのである。また扱いにくいテーマであるがゆえに、老人がパウルに報告を依頼するという「語りの間接化」を必要としたのだと言える。

この小説は二つの大きな物語、グストロフ号をめぐる物語と、パウルを中心とする「親 - 子 - 孫」という三世代の物語が混在しながら進められていく。本論での筆者の関心は後者にあるので、この三世代について次章では詳しく説明しておきたい。

2. 三世代の物語

この小説は、母親トゥラ、その息子で語り手であるパウル、それに彼の息子コニーという、トーマス・マンの『ブッデンブローク家の人々』を彷彿とさせるような三世代の物語である。ここで三人の生い立ちをまとめておこう。

トゥラは1928年、東プロイセンに隣接するダンツィヒ郊外に生まれた。地理的な重要性から近隣諸国の支配を受けてきたこの港町は、当時は国際連盟の管轄下にある自由都市で、ドイツ人、ポーランド人、ユダヤ人などが住む多民族的な町だった。戦争がはじまりソ連軍が押し寄せてくると、彼女はグストロフ号に乗ってダンツィヒを脱出する。グストロフ号がソ連の潜水艦による攻撃を受けると、彼女は駆逐艦「獅子号」に避難し、この船上でパウルを出産した。その後は東ドイツ北部の町シュヴェリーンに移り住み、家具職人となる。

パウルは1945年1月30日、獅子号の中で生を受けた。シュヴェリーンで母に育てられたが、ベルリンの壁が築かれる直前に自由を求め西ベルリンへ移った。(ベルリンの壁ができるまでは、東ドイツ国民は東ベルリン経由で西ベルリンへ行くことができた。そして西ベルリンで亡命申請をすれば西

ドイツ本国へ行くことも可能であった。そのような東ドイツ国民が増えたために、東ドイツ政府は西ベルリンを取り囲むようにベルリンの壁を建設したわけである。) その後彼は大学に入るが 1967 年には中退し、出版社勤務を経て現在はフリーのジャーナリストとして生計を立てている。1980 年にはガールフレンドのガビーとの間に子ども (コニー) ができたことを機に結婚するが、1987 年には離婚している。

コニーは 1980 年、西ベルリンに生まれた。その後西ドイツのメルンに移り住む。彼は学校の成績はいいのだが、「かなり大人びた」(44) 話し方をする、孤独を愛する少年として描かれている。彼の母ガビー曰く、「典型的な一匹狼で、社会的に適合していくのが困難」(67) なタイプであった。1989 年ベルリンの壁が崩壊すると祖母トゥラとの交流も始まり、15 歳のとき (1995 年) に彼女からパソコンをプレゼントしてもらった。このパソコンがコニーのもともと持っていた歴史への関心を加速させていくことになる。

パウルはグストロフ号の調査の中で、ナチス高官ヴィルヘルム・グストロフを「殉教者」として称える www.blutzeuge.de というウェブサイト、息子のコニーが運営していることに気づく。グストロフはユダヤ人学生ダーヴィット・フランクフルターに殺害された。この「殉教者 (Blutzeuge)」のために、本来は「ヒトラー号」と命名されるはずだった船が「グストロフ号」となったのであった。このサイトに祖母トゥラによる影響があることをパウルは見抜く。というのも、サイト上で主張されていることが、普段からトゥラが言っていることと同じだったからである (Vgl. 89)。コニーは長期休暇を祖母のいるシュヴェリーンで過ごした。そして当地出身のヴィルヘルム・グストロフについて、ネオナチの集まりで講演もしている。

やがて上述のサイト上で、グストロフを銃殺したユダヤ人ダーヴィット・フランクフルターを自称する人物 (実際はヴォルフガング・シュトレンプリンという名のドイツ人高校生) とヴィルヘルム・グストロフを名乗るコニーとの間で論争が起きる。

実際に二人はシュヴェリーンで会うことになる。グストロフの名前が刻まれた記念碑の前で、コニーは「ダーヴィット」を殺害する。これは、グストロフがユダヤ人ダーヴィットに殺されたことに対する象徴的な報復であった。コニーは少年院から出た後も、新たに右翼的网站を開設していた。コニーは決して改心したわけではなかった。「終わらない。決して終わらない」(216)。このようなパウルの言葉で小説は幕を閉じる。

3. 研究史概観

ここでこの作品の研究史を振り返っておきたい。ドイツ本国では発表当初から賛否両論分かれていた。2015 年のグラスの死去に関連して Jochen Kürten 氏がまとめた記事⁽³⁾をもとに、この作品の評価を紹介しておく。

まずは否定的な意見から見ていこう。Süddeutsche Zeitung では、「ギュンター・グラスはドイツの犠牲の記憶という、苦しみに満ちた遺産を引き立てようとした。彼はどこに大金が眠っているか分

かっている。つまり（グストロフ号が沈んでいる）シュトルプミュンデの北のバルト海の中に」と述べてグラスを批判した。tageszeitung では、この作品が「表面的な論文」または「文学的に装飾された歴史的な特集記事」と述べて、その文学的価値を否定した。Die Zeit は「ときに神経をいらだたせる、お気楽と言ってよいほどの杓子定規」と見なした。一方で Die Welt は「この何年かで最もよいグラス」作品と称賛し、左派を代表する作家であるグラスがこの主題を引き受けたことを賞賛した。Der Freitag は「ギュンター・グラスはありのままの歴史の悲劇 (...) を言語化した」と評価した。Der Spiegel でも、「見事に感動的に書かれ」⁽⁴⁾ ていると述べて、この作品を肯定的に取り上げている。

さて、東方難民の苦難を描いた小説はグラスが最初ではない。ヴァルター・ケンポフスキの四部作『音響測深器』(Echolot, 1993-2005)、H.U.トライヒェルの『失われた者』(Der Verlorene, 1998) などもあるし、被害者としてのドイツ人を描いたものとして、W.G.ゼーバルトの『空爆と文学』(Luftkrieg und Literatur, 1999) も有名である。⁽⁵⁾ テレビでも 2000 年代になると「追放」の過去が語られ、映像化されることが多くなってきた。⁽⁶⁾ だが 1999 年にノーベル文学賞を受賞していたグラスが扱ったことで、俄然このテーマは注目を浴びることになった。

本論の目的はこの三世代の物語を解きほぐし、登場人物の抱える問題を具体的に明らかにすることにある。また評価の分かれる本作品について筆者なりの評価をしておきたい。本作品の主要テーマは、パウルが息子コニーの中に見て取った右傾化であるが、本論ではまずコニーに多大な影響を与えたトゥラを扱い、その次に象徴的なユダヤ人殺しを行うコニーを見ていくことにする。

4. トウラ

トゥラは、いつも家具用の膠の匂いを漂わせている、辺境の地に暮らす小市民の娘として描かれている。また男好きで、組織に属することが嫌いなアナーキーな女性というのが作品から得られる彼女の印象だろう。そんな自由奔放な田舎娘として描かれている彼女が、その都度組み込まれる体制（ナチスドイツ、DDR、BRD）に対して、従順な姿勢を見せている点は注目すべきである。ナチス時代はヒトラーの崇拜者ではなかったものの、当局の思惑通り「等級のない KdF 船」(40) を賛美し、DDR 時代には「人民公社の家具製作班で班長」(21) をし、「< 功労活動家 > として表彰」(178) される。だがベルリンの壁が崩壊し、DDR が BRD に吸収されると、突如「自分の属していたかつての人民公社の家具工場の (...) 事後処理と民営化にさえ関与した」(90) のであった。体制に過度に従順な姿勢の極致は、DDR 時代のスターリンの死に対する彼女の態度であろう。スターリンが死んだとき、息子のパウルは「今まで見たこともないほど彼女が泣いているのを見た」(39f.) のであった。自身の急激な変わり身に対して、彼女自身も葛藤を感じている。DDR 時代、ソ連の批判は大っぴらにはできなかった。だからグストロフ号を沈めたソ連軍潜水艦の乗組員に対しても「我ら労働者たちと連帯したソ連海軍の友好的な英雄たち」(140) と言わなくてはならなかった。彼女は本当は憎くて仕方なかっただろう。それ故、彼女のドイツ語は「標準語」(Ebd.) となり、しかも「ぎこちなく」(Ebd.) なるのである。

その都度の体制に対して過剰なまでに順応してしまうのは、大きなものに組み込まれていく弱者の、なりふり構わぬ必死の生き残り戦略である。大きなものの中で自身がマイノリティーであることを意識するからこそ、過剰に反応してしまうのである。この「マイノリティー意識」、または「疎外された者としての自己意識」と言い換えてもよいが、こうした心的態度こそ彼女の特性である。だからこそ息子には出世してほしいと彼女は強く願う。「私のパウルちゃんは特別な！」(42) というのが「母の口癖」(Ebd.)で、「いつかきっと有名になる」(Ebd.)ことを彼女は願った。DDR時代も圧力があつたにもかかわらず、息子を西ベルリンへ送り出している。自身に日が当たらなかつたからこそ、つまりマイノリティー的存在だつたからこそ、余計に息子に期待するのである。

トゥラのマイノリティー意識が最も現れているのが、自身が体験したグストロフ号沈没事件である。自分は辛くも生き残ることができたが、多くの子どもが亡くなっていくのを彼女は目撃した。この光景が彼女のトラウマとなっている。彼女はグストロフの記念碑にバラの花を捧げるが、それは「船と、あのとき氷のように冷たい海の中で亡くなったすべての子どもたちのため」(91)であつたと述べているし、髪が白くなった理由を問われる度に、「子どもたちがみんな頭を下にして浮かんでいるのを見たとき」(140)と答えている。(子どもの溺死ということでは彼女の弟のコンラートも関係している。)この事件のことを語るのはドイツ社会では「タブー」(31)であつた。だからこそ歴史の隅に追いやられたことに対して彼女は疎外感を強く抱くことになり、同時にそうした現状を不満に思っているのである。それを歴史の前面へと押し出したいのである。彼女はこの事件を「世界中に伝えることが息子の義務」(32)だと思ひ込んでいたが、その息子は「期待外れ」(43, 93)であつた。だからこそ、今度は孫のコニーに期待し、自身の体験を語るのである。

5. コニー

トゥラは孫のコニーに頻りに自身の体験を語ってきた。それは作品中繰り返し述べられている。以下に三つ挙げておこう。最初の二つは語り手パウルの説明、三つ目はトゥラの言葉を間接話法化したものである。

彼女(トゥラ)が彼(コニー)にそれ(グストロフ号のこと)を植え付けたのだ。そのことと、船が沈んだときに私を生んだこと、そのために母よ、私はあなたを憎んでいます。(70)

彼女が彼に避難民の物語を、残虐な物語を、暴行の物語を詰め込んだのだ。それは確かに彼女が実際に体験したことではなかつたが、1944年10月にソ連軍の戦車が第三帝国の東部国境を越えて侵攻し、ゴルダップ郡とグンピンネン郡へと進撃してきて以来、その恐怖が蔓延するよう、至る所で語られ、広められたことであつた。(100f.)

これまで誰も知ろうとしなかつた(...)船が、孫には決して眠くなることのない質問を誘発する

ものとなりました。しかし「コンラートちゃん」は「女性と小さな子どもを満載した美しい KdF 蒸気船」に関心を抱いて、生き残った祖母にしつこく質問しただけではありません。彼はむしろ特に私の願いによって、彼のものすごい知識の「一切切を」、プレゼントされたパソコンの助けによって至る所に、オーストラリアからアラスカにまで広めようとしたのです。(180f.)

一方、コニーは祖母に対してどのように振舞っただろうか。もし祖母の話が気に入らないのであれば、それを真に受けず聞き流すこともできただろう。しかし彼はそうしなかった。それは彼にも大いに共感できる部分があったからに他ならない。

ここで裁判でのコニーの言葉に注目してみたい。彼はこう述べている。「僕はヴィルヘルム・グストロフと同じように、ユダヤ人はアリア人種の中の異物 (Fremdkörper) である、という信念を持っているのです」(196)。この「異物」という言葉が、彼の殺意を解明するキーワードである。

前に述べたように、コニーは非常に賢く成績もよいが、クラブ活動にも興味を示さない。「典型的な一匹狼で、社会的に適合していくのが困難」(67) なタイプで、周りから浮いていた。そんな疎外感を埋めるべく、祖母のトゥラを仲介にして、自分よりもさらに疎外された「異物」として向かったのがユダヤ人だった、ということは十分に予想できることである。ユダヤ人を叩くことによって自己を慰め、自己存在を正当化し、確立させていたのではないだろうか。

またインターネットという閉鎖空間が、「それ自体は筋が通って」(193) いても傍から見れば「狂気」(Ebd.) でしかない彼の論理を加速させていく。閉鎖されているがゆえに、彼の考え方を間違っていると指摘する者もない。また「チャット」というコミュニケーション方法は、相手と実際に「会話」できるという点では「現実」であるが、インターネットという仮想空間で見知らぬ相手となされるという点では「仮想」である。チャットが彼に与えた役割は大きく、「現実」と「仮想」の境界が曖昧になっていったことは間違いない。だからこそ、グストロフを暗殺したダーヴィットへ象徴的に報復するという意味で、ユダヤ人を自称する全くの別人を殺すという具体的行動が取れたのである。チャットの中には次のような会話がある。

「もし総統が私を生き返らせてくれたら、君はまた私を撃ってくれるかい？」というヴィルヘルムがチャットルームに書き込んだ問いかけに対して、ダーヴィットは折り返しこう返事をした。

「いや、この次は君が私を撃ち殺していいんだよ」。(49)

ダーヴィットの、つまりシュトレンプリンの言葉をそのまま受け取って、グストロフたるコニーは彼を射殺するのである。

6. ステレオタイプの反応への批判

社会や歴史から疎外された祖母の経験が、同じく疎外された孫へと引き継がれ、その結果起こって

しまったのが「ダーヴィット」殺害事件である。また、自分の体験がアウシュヴィッツに代表されるユダヤ人迫害に隠されて語られてこなかったことへの憤りが、結局この事件を引き起こしたとも言える。パウルの仕事を依頼した老人は、極右の連中に都合よくこの歴史的悲劇が利用されてしまうことに危機意識を抱いて、パウルに仕事を依頼したのであった。だが結局は、このグストロフ号事件は当初想定していたスキンヘッドのネオナチではなく、普通の高校生によって利用されてしまった。決してネオナチだけが外国人への嫌悪をもって暴力的な力を行使するのではない。普通の高校生でも、条件次第で変貌するのである。

「外国人に対して暴力事件を起こすのはスキンヘッドのネオナチ」という固定化されたステレオタイプをここでコニーは打ち破っているわけだが、この作品ではこうした「固定化されたものの見方」こそ批判の対象となっている。⁽⁷⁾

ここで一つ具体例を見ておこう。少年院に収容されたコニーは、グストロフ号の模型を父親であるパウルの前で叩き割ってみせる。それに対してパウルは息子にありきたりのことしか言えない。

私は自分でもよく分からないことをしゃべっていた。何か積極的なことを。「決してあきらめてはいけない」とか「もう一度いっしょに最初から始めよう」、あるいはアメリカ映画をそのまま口真似しただけの馬鹿げたセリフ、「君を誇りに思う」。(216)

なぜコニーはグストロフ号の模型を叩き割るという行為を、あえて父親に見せたのだろうか。それは父親がどんな言葉をかけてくるか聞いてみたいという欲求があったからだろうし、同時に「本当の信念というものを持っていない」(210) 父からは、ありきたりの言葉しか返ってこないという自身の予測を確認してみたかったからではないだろうか。

パウルの信念のなさは、彼の新聞への寄稿や結婚においても強調されている。パウルは右寄りのシュプリングー系の新聞であれ、*tageszeitung* のような左寄りの新聞であれ、その新聞にふさわしいように「いつも定められた文章を口ずさんできた」(Ebd.) し、結婚に際しても自分で決めず、ガビーが「ひそかにピルの服装をやめ、はっきりと私との関係によって妊娠したために、私を戸籍役場で引っ張って行った」(42) のであった。また彼の計画倒れの書籍『シュプリングーとドゥチュケの間』(Ebd.) も両陣営の間で漂う彼の曖昧な態度を表している。ちなみのこの書籍のタイトルは、彼がベルリン工科大学時代に受けていたヘレラー教授の講義のタイトル「古典主義と近代の間」(30) を彷彿とさせるものである。彼は自分の信念を持たない「日和見主義者」⁽⁸⁾ なのである。

コニーは模型を叩き割ったあと、パウルに向かって「満足した、父さん？(Zufrieden jetzt, Vati?)」(216) と簡素に言う。Vati という甘えるような幼児語はパウルに「予期しない」(215) 言い方である。明らかにコニーはここで父親を馬鹿にしている。どうせお決まりの言葉しか返ってこないと高を括っているのである。案の定、父親は自分でも「馬鹿げた」と感じる、定型的な言葉しか返すことができない。そんな言葉ではコニーには何も届きはしない。だからコニーの「狂気」(193) は「決して終わらない」(216) のである。

7. まとめ

最後にまとめておこう。トゥラとコニーの物語を通じて、固定化された視点への批判を読み取ることができる。物事をカテゴライズして整理することはもちろん必要なことで、そうしたことを通じて我々は込み入った世界を把握することができる。しかしながら、そのカテゴライズが逆に我々の思考する力を弱めていることも知っておかねばならない。そういったことをこの小説は訴えかけているように思える。また「いつも定められた文章を口ずさむ」(210) だけでは問題解決しない、そういった問題意識をこの作品は投げかけている。この作品はタブー破りの派手なテーマで物議を醸したが、その背後には実はもっと根源的な問題が隠されている。もっと読まれて良い作品だと言えよう。

テキスト：

Grass, Günter: *Im Krebsgang. Eine Novelle*. 12. Auflage. München (dtv) 2016. 本書からの引用は、本文中に () を入れてページ数を記載した。

注：

- (1) グストロフ号事件については次の文献に詳しい記述がある。竹野弘之：『ドキュメント 豪華客船の悲劇』、海文堂、2008年。(第10章「ヴィルヘルム・グストロフ」の惨劇、189-202頁)
- (2) 佐藤成基氏によれば、この老人の言葉は1990年代末以降ドイツメディアや連邦議会などの公共空間で語られるようになったものと一致している。それはホロコーストに代表されるナチスドイツの罪を認め反省しながらも、同時に「追放」や「避難」というドイツの過去もまた、右翼の政治的武器にされないために広く国民に共有されねばならないという意識(過去の「並立化」)である。これがこの小説の背景となっている、と佐藤氏は述べている。(佐藤成基：『ナショナル・アイデンティティと領土』、新曜社、2008年、296-7頁)
- (3) Kürten, Jochen: *Im Krebsgang durch die Geschichte. Zum Tode von Günter Grass*. (Deutsche Welle, 14. 04. 2015, <https://www.dw.com/de/im-krebsgang-durch-die-geschichte/a-18380475>) [閲覧日：2018年12月21日]
- (4) Hage, Volker: „Das tausendmalige Sterben“. (DER SPIEGEL 6/2002, <http://www.spiegel.de/spiegel/print/d-21362876.html>) [閲覧日：2018年12月21日]
- (5) ドイツ人避難民や追放者を扱った文学について、以下の文献に概略的な解説があり参考になる。永畑紗織：「ドイツ人の東欧からの引揚げや故郷喪失をめぐる文学」、『立命館言語文化研究』29巻3号、立命館大学国際言語文化研究所、2018年、91-101頁。
- (6) 2000年代初めの映像化の具体例としては、ARDの『被追放者 - ヒトラーの最後の犠牲者』(Die Vertriebenen: Hitlers letzte Opfer, 2001) や ZDFの『大規模避難 - 被追放者の運命』(Die große Flucht: Das Schicksal der Vertriebenen, 2002) が挙げられる。(佐藤 295頁参照)
- (7) 現時点で『蟹の横歩き』に関する日本語論文は二点確認できる。(依岡隆児：「ポリフォニーな語り - ギュンター・グラス『蟹の横歩き』：試論 -」、『ドイツ文学論集』第37号、日本独文学会中国・四国支部、2004年、52-61頁。岡山具隆：「文学とは、邪魔をし、混乱させるものである - ギュンター・グラスの小説『蟹の横歩き』について -」、『ドイツ文学』第133号、日本独文学会、2007年、184-194頁。) 以下、二論文を簡単にまとめておこうが、本論で指摘した点はこれらの論文でも論じられている。

依岡論文では、その多声的語り方に焦点が当てられている。グラスを彷彿とさせる依頼主である老人と依

頼されたパウルの間でのやり取りでは、双方の独断的・個人的な思いがぶつかりある個所がいくつもある。こうした個所は、読者を、語りのある方そのものに対する批判的な姿勢へと向かわせることになる。つまり、語り手が一人の個人である限り、そこには語り手の思惑が介入せざるをえない、ということである。こうして語りに対する相対化も生まれてくることになる。老人とパウルの思惑のずれを注視すべきなのである。

また裁判の際、語り手であるパウルが前回の自分の意見を否定する場面がある。そういった箇所を読むと、読者は「語り手の解釈も他の解釈と同様、絶対的ではなく、個人的な一見解にすぎないという印象を受けるだろう。こうした叙述の仕方、語り手の語りをも相対化する多声的叙述を可能にしている」。(依岡 57 頁)

パウルは多様なメディアを通じてこの事件を調べていく。生き残りのトゥラには、これらは真実を言い当てていないと批判されるが、そのトゥラ自身の証言に対して、パウルは彼女の意見を保留する。彼女の話す内容に虚構が紛れ込んでいるのを見抜いているからである。こうしたことは「語り自体に内在する偽りや表象メディアの宿命である虚構性にたえず意識を向けさせ、歴史事件にまつわる諸言説や表現のゆがみに気づかせる」(依岡 56 頁) ことになる。ここにこの小説の最大の特徴がある、と依岡氏は指摘する。

岡山論文中で指摘されているのは、トゥラとコニーの言動への違和感である。トゥラは東方難民としてグストロフ号に乗り込んで、そこで死んでいたかもしれないにもかかわらず、この船を称賛する。コニーも普通の高校生として描かれているにもかかわらず、強い殺意を抱かないで淡々と引き金を引く。二人に対してこうした違和感を抱いてしまうのは、「われわれの身に付けているステレオタイプや価値規範から逸脱するものだから」(岡山 190 頁) である。そう考えると「この小説では、トゥラやコニーのねじれた過去との付き合い方そのものが問題なのではなく、既成のタブーやいわゆる「過去の克服」ということばに代表されるこれまでの過去をめぐるディスクールに依拠したわれわれ読者の思考停止こそが問題にされている」(同上) のである。

そのことが具体的に描かれているのが、コニーの裁判の場面である。動機の解明に必死な大人たちの証言は、これまでのドイツにおける過去のディスクールに則った型通りのものである。同じ事がユダヤ人に対する罪の意識にも見られる。コニーによる殺人事件に際して、新聞の見出しには「ユダヤ人憎悪から生まれた卑劣な殺人」などの派手な文句が躍ったが、被害者がユダヤ人でないと分かるとメディアでも次第に扱われなくなる。ドイツメディアのユダヤ人に対する条件反射的な行動への批判として読み取ることができる、と岡山氏は指摘している。

- (8) Bernhardt, Rüdiger: *Günter Grass „Im Krebsgang“*. Königs Erläuterungen Band 416. 4. Auflage. Hollfeld (C. Bange) 2017, S. 59.